

〈金融史パネル〉

近代移行期日本の貨幣・信用

流通科学大学 加藤慶一郎

日本銀行 鎮目雅人

江戸後期の日本では、大坂を中央市場として、年貢米のほか様々な地方特産品が流通する全国規模の商品市場が形成されていた。天保期以降、人口の大部分を占める農民の間に商品経済が浸透し、中央市場である大坂を経由しないかたちでの各地域市場相互間の取引が活発化、開港に伴い民間レベルでの貿易取引が開始され、さらに明治維新後の地租金納化により各地域で米が商品として取引されるようになるなど、幕末維新时期を通じて市場経済化が進展したが、近代的な全国市場の統一は 20 世紀入り後まで持ち越された（本城 2002）。

市場経済化が進展する中であって、取引を媒介していた貨幣と信用についてみると、江戸期には、貨幣については、幕府発行の基準貨幣としての三貨（両金・匁銀・文銭）と藩の名義で発行される藩札が、地域毎の特性を孕みつつ重層的に流通する一方、両替商をはじめとする商人相互の顔のみえる関係に基づく信用のネットワークが経済取引の媒介の役割を果たしていた（岩橋 2002 ほか）。明治期に入ると、貨幣については、両建ての政府紙幣である太政官札に始まり、わが国最初の銀行券とされる為替会社紙幣、統一通貨単位としての円の導入と同時に発行された円建ての政府紙幣である新紙幣、当初兌換銀行券として導入されたが不換銀行券に転化した国立銀行券を経て、中央銀行である日本銀行が発行する銀貨兌換の銀行券が流通貨幣の中心を占めるに至る。信用面では、旧来の両替商・商人から、新設の国立銀行・私立銀行への移行が進展し（石井 2007）、最終的には、専門金融機関としての中央銀行—民間銀行のネットワークが経済取引を媒介する体制が整備されていく（靄見 2002）。

以上が、先行研究によって明らかにされてきた近代移行期における貨幣と信用の概観であるが、江戸期における分権的なシステムから、明治期における集権的なシステムへの移行の実態については、なお多角的な観点から検討を加える余地が多い。本報告では、上記の問題意識に立って、これまで米国の **National Bank** 制度に倣ったとされてきた国立銀行制度に着目し、制度の立案者達の意図、および、国立銀行が実際に果たしていた機能とその限界について整理する。とくに、既存の両替商・商人の信用ネットワークとの連続性に留意しつつ、発券機能を有する複数の銀行間のコルレス関係の構築という側面に焦点を当て、地方における事例を織り込みつつ、移行期における貨幣と信用の実相の考察を試みる。

参考文献は多岐にわたるが、以下にこれまでの研究を踏まえた最近の文献を掲げる。

- ・本城正徳(2002)「近世の商品市場」；中西聡(2002)「近代の商品市場」；岩橋勝(2002)「近世の貨幣・信用」；靄見誠良(2002)「近代の貨幣・信用」；桜井英治・中西聡編『流通経済史』山川出版社
- ・石井寛治『経済発展と両替商金融』（2007）有斐閣